Title	キリスト教大学の行うボランティアとは何か ： 直面する三つの問い(第二回東日本大震災国際神学シンポジウム ： パネルディスカッション「苦難に寄り添い前に向かう教会」)
Author(s)	伊藤, 悟
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 71-77
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4947
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第二回東日本大震災国際神学シンポジウム】

パネルディスカッション「苦難に寄り添い前に向かう教会」

キリスト教大学の行うボランティアとは何か

――直面する三つの問い――

伊藤　悟

1. アカデミズムとボランタリズム

震災当日、青山学院が約七〇〇〇名の帰宅困難者の受け入れをしているなか、私も帰宅困難になりながら、あの夜すでに東北への学生ボランティア派遣の企画書を書き始めていた。そのときはまだ知る由もなかった被害の甚大さゆえにその企画書を使うことはなかったのだが、それでも何かしなければと私が思いあぐねていたとき、同僚のチャプレンから「まず祈ろう」と言われ、私はハッとさせられた。他大学ではできない最初のボランタリーな被災地支援、それが祈ることであった。このことは何にも増してその後の活動の契機となった。チャプレンだけでも、との思いに反し、一週間後の金曜日に設定した祈祷会には、口コミだけで学生・教職員・卒業生・法人役員ら二〇〇名近くが集まり、会場のチャペルに溢れた。大きな悲劇の前に立たされて祈ることのできるアカデミック共同体が存在することの意義を思わされた。最初の半年は毎週金曜日、その後は毎月一一日に「被災地を覚えての祈祷会」を二つのキャンパスでいまも継続

して行っている。

震災後、学生たちのボランティア熱は非常に高まっていった。諸準備を整えて七月の第一週目、通常より一カ月早く夏休みを迎え、すぐに「ボランティア派遣式」を行い、ここでも祈って約五〇〇名の学生ボランティアを五つの被災地プロジェクトに送り出した。

大学と教会、大学とＮＰＯ、大学と企業のコラボレーションを模索しての実施となった。その後、今日に至るまで継続して支援を行ってきたが、被災地のニーズや支援のフェーズはどんどん変化をしていく。大学独自ではそれに細かく対応することは困難だったと思うが、地元住民や教会、ＮＰＯの現地スタッフからのリアルタイムな情報提供は非常に重要であって、大学との協働を可能たらしめた。青山学院が行った五つのプロジェクトのうちの一つは、キリスト教系のＮＰＯと連携して行い、そのＮＰＯが酪農学園大学、ルーテル学院大学とも連携したため、期せずして三つのキリスト教大学とキリスト教ＮＰＯが協働するという実例を生み出すことになった。この事業報告は、冊子『歩みをともに』[1]とＤＶＤにまとめられている。

2．直面する三つの問い

さて、ここでは、キリスト教大学の被災地支援ボランティア活動の中で生起してきた三つの問いを紹介してみたい。

〔問1〕カンマなのか、ピリオドなのか？――死から復活へ

まず第一に、被災地の人々と接するなかで、同じ被災者のなかにも二つの声があることに気づかされた。一つは「元の生活を取り戻したい」という声、もう一つは「元に戻るのではマズイ」という声である。「元の生活を取り戻したい」という声は高齢者からよく聞かれ、「それではマズイ」という声は青年団や商工会など比較的若い世代の方々から聞かれた。つまり仙台など一部地域を除いては東北では過疎化が進み、地場産業も地域経済もすでに震災前から非常に深刻な状況であった。それを復旧して元に戻すのではだめだ、これを機に新しい街づくりや地場産業の見直しをしなければならないのだ、ということであった。それらの方々は、復旧ではなく復興だということを当初から言われていた。

私たちキリスト者は、復旧・復興ではなく、さらに「復活」を語っていかなければならない民である。今週は受難週のときを過ごしているわけであるが、死ななければ復活は起こらない。死ののちに復活がある。日本は第二次世界大戦にせよ、天皇制の問題にせよ、沖縄問題にせよ、どうにも過去の清算するのが下手な国である。とりあえず何とかその場をやり過ごして、お茶を濁して歴史を遣り繰りしてきた状況が散見される。あらゆることを、ピリオドではなく、カンマで行こうとする。しかし、死と復活はカンマではなくピリオドであり、ピリオドをしっかり打つときに、新しいセンテンスが、新しい命が、新しい時代が始まるのである。過去を清算しきれない日本。これだけのことが起こっても、原発の精算ができないでいる。

さらに誤解を恐れずに言うなら、日本人はピリオドを打てないから、死の問題を引きずる。これは日本人固有の死生観の問題でもあるが、ピリオドとしての死なしに、復活はあり得るのか。このことは飛躍しているようではあるが、日本の文脈のなかで復活の福音を伝えることが果たして可能かどうかを問うものでもある。キリスト教学校が被災地にボ

ランティア派遣を行うときにも重要なカギを握る。破壊しつくされた被災地の現状といのちの問題をどのように伝えるかということである。これが一つ目の問いである。死と復活の問題、伝道の問題としての日本人の死生観の問題である。

〔問2〕教育プログラムとしての被災地支援は成立するか？

二つ目の問いは、「教育プログラムとしての被災地支援は成立するか」という問いである。被災地支援では、あくまでも被災地のニーズや被災者の幸福のための復興支援が展開されるのは言うまでもないことである。営利目的、布教目的など支援する側の自己目的は排除される。とりわけボランティアは、あくまでボランタリーな活動であって、しかも支援者の思いではなく被災者中心の展開がなされねばならない。おそらく教会やＮＰＯはそれを徹底させることが可能だと思われる。

では学校や大学が行う被災地ボランティアはどうであろうか。特にキリスト教学校が行うボランティアは、単に人道的支援というのではなく、そこには隣人を愛するとか、泣く者と共に涙するとか、愛すること・隣人になることを体験や実践を通して学ぶということが起こるし、学校プログラムとして行う場合、教師はそうした状況を引き起こさねばならないという使命に駆られる。参加学生が明らかに教室とは異なる力を発揮し、成長を遂げることに、私たちは大事な教育的な意義があることに気づいているからである。つまりある意味で、意図的にボランティア教育を行おうとする。そうすると、ボランティア派遣には次第に「教育」という別の目的が加わるようになっていく。そしてついに教師は、教育プログラムとして成立し得る支援活動を探し始めるようになる。学生や生徒らにとって一番よい学びになる支援先を求めようとするのである。つまりそこでは、復興支援と自己目的化との間での振幅が起こる。純粋に被災地中心の支

援ではなく、目の前にいる生徒や学生たちの成長を期待することが起こる。それはどうしても起こる葛藤である。

私はこの課題の克服に、ボランティアよりも、キリスト教大学においては、むしろ「キリスト教サービス・ラーニング」を提唱したいと思う。ボランティアは自発的意思に基づいた活動であり、「活動そのもの」に重きが置かれるが、サービス・ラーニングは、奉仕の場を教育の場とし、奉仕することを学んでいこうとする教育カリキュラムの一つのかたちである。人に仕えること、サービスすることを意図的に学び、学んだことを生かして人と社会に仕える、それによって地域が活性化したり人々がよりよく生きることになっていく。しかしまた、仕えることを通して、不足している学びやスキルに気づいてゆき、支援の必要な人々の目線で仕えることを学んだり研究したりしていくという教育方法である。単なる体験学習や一過性の奉仕活動とは異なり、学校と社会とのインタラクティヴな変化を引き起こす教育プログラムである。現場でのサービスと教室での学びが一体となって、互いに新たな変容が生じることを目指そうとする。

さらにそうした学びと実践を通して、次世代のソーシャル・サービスのためのリーダーやコーディネーター、エキスパートが養成されていき、ひいては彼らがグローバル・コミュニティの担い手となっていくこともヴィジョンとして掲げていく。「仕えること」と「学ぶこと」の融合はキリスト教教育の大きな課題と言えよう。また人と人が分かち合い、愛し合い、赦し合い、認め合う。そうした人間を育てるというのはグローバル時代のキリスト教大学の大きな使命であろう。キリスト教大学には、意図的に、戦略的に、市民社会あるいは神の国の担い手を育成する・養成するという責務がある。力への愛ではなく、愛への力を結集できる次世代のグローバル・リーダー、クリスチャン・リーダーの育成は教室と現場においてなされていくのである。

（問3）自立支援はキリスト教的か？

三つ目の問いは、「自立支援」という考え方についてである。自立支援は被災地が自立するための足がかりを作っていく支援の仕方であり、支援者が不在になっても被災者が自助努力をして生きていける社会やコミュニティの構築を目指して展開される。国際支援や開発支援も、おおよそ近年は自立支援が重視されている。いわば時が来れば支援者がフェード・アウトすることをあらかじめ想定した支援である。自転車に乗れるようになるためには、後ろでしばらく支えてくれる誰かが必要である。しかし一度乗れるようになったなら、支えは不要になる。そのように支えが要らなくなり自立することを目指すのが自立支援のかたちである。今回私たちのグループの一つは二年にわたって仮設住宅のコミュニティ形成のお手伝いをしてきたのであるが、この三月（二〇一三年）をもって、そこでの支援活動を終結して現地スタッフも撤収した。自治会などの住民組織が出来上がり、それがうまく機能し始めたからである。

主イエスのたとえ話や奇跡物語などについて自立志向の聖書解釈も存在する。しかし「自立」を最終目標にしてしまってよいのかどうか、そこが私の三つ目の問いである。自立することを目指すとなると、自立できた人はよくて、なかなか自立できない人は目標に到達できないダメな人とされてしまう。それは果たして正しいか。自分の家を新築して仮設住宅を出る人が次々と出てきている。残される人は誰なのか。自立至上主義だとしたら、それはその先に新自由主義と大いに接近する危険性を孕んではいないだろうか。強者と弱者の二極構造（格差社会）を助長することに加担することになりはしないだろうか。

一方、共生との関係はどうなるのか。共生をゴールとした場合、自立支援のかたち、すなわち「あとは自分たちで頑張って」というかたちは、果たして承認されるであろうか。自立あっての共生か、共生あっての自立か。自立と共生

は背反概念なのか。私たちがキリスト教大学として被災地支援をしようとするとき、その最終的に目指すべきはどこなのであろう。自立を目指すのか、共生を目指すのか。自立と共生のさじ加減を、支援者はどのように見極めるべきなのか。じつに私たちの中の「支援」や「仕える」ことの概念が問われている。

それに対する私なりの一つの答えは、自立か共生かの二者択一ではなく、自立と共生のあいだに置く中間的なコミュニティが必要なのではないかということである。自立でも共生でもない。あるいは、緩やかな自立と緩やかな共生が許される場。私はその一つが教会なのではないかと思っている。

注

（1）特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン、東日本大震災緊急・復興事業 活動報告書。〈http://www.childfund.or.jp/form/pdf/CFJ_ER_report.pdf〉